



藤井 秀昭 ほか著
信頼と安心の日本経済
岡村 宗二 編著



勁草書房 2008

本書の『信頼と安心の日本経済』は、21世紀初めの日本経済社会において話題となっている市場主義、小泉改革、経済バブル、デフレーション、グローバル化、経済格差、環境質劣化、資源枯渇問題等のテーマに関する分析及び論評が多様な観点から示されています。

本書の内容は、岡村宗二教授（大東文化大学経済学部）が主宰する自主的な研究会（大手町PEJ研究会）において、約3年間にわたって行われた議論の成果を纏めたものです。当時、私は東京都内にあるシンクタンクで研究に従事し、大東文化大学でも非常勤講師を務めておりました。その大東文化大学で一本、筋の通った正統な経済学者が教鞭をとられていることを知り、勇気を振り絞って岡村教授の研究室のドアをノックすることにしました。当初、しどろもどろに私の研究内容を教授にご紹介申し上げたのですが、それに対して大変ご関心をお寄せいただき、それ以降、岡村教授は公私にわたり小職に対して貴重なご指導ならびにアドバイスをくださるようになりました。

ある日、岡村教授から「藤井さん、あなたが勤務しているシンクタンクのオフィスのある大手町（東京都千代田区）界隈で、毎月一度、異分野の研究者や実務家が定期的に集まって今日の日本経済社会について議論する研究会を作りませんか」とのご相談を受けました。驚いたことに、岡村教授のご提案は、日本経済社会に対して「同じ分析方法で、同じ考え方をもち、同じ主義主張をする人たちが集まる研究会」ではなくて、「異なる分析手法で、異なる考え方をもち、異なる主義主張をする人たちの集まる研究会」というものでした。

こうして「大手町PEJ研究会」は2006年から毎月一回のペースで始まりました。研究会の参加者はさまざま、毎回、参加者から自主的に日本経済社会に関連するテーマを取り上げて自ら講師を引き受け、その内容を喧喧囂囂と約2時間にわたり議論するというものでした。当然のことながら、毎回、2時間におよぶ議論の後に、場所を変えてお酒を飲

みながら自由闊達に議論の第2ラウンドが行われました。

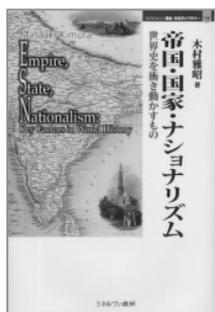
参加者の専門分野は、社会政策論（雇用政策）・人口問題、近代経済学（マクロ経済学、ミクロ経済学、財政学）、日本経済論、中小企業論、応用計量経済学、マルクス経済学、機械工学・環境工学、日本都市史（江戸文化史）、農業経済学、交通経済学、エネルギー経済学、環境経済学、政策金融、金融論、経済学説史、地球システム工学と実に広い領域であり、総括する役割をお引き受けくださった主宰者の岡村教授の気さくで一本筋の通った人柄と力量があって初めて研究会が継続できたと評価しています（研究会は現在も継続しています）。

本書の『信頼と安心の日本経済』が上梓された経緯は上述のとおりであります。「大手町PEJ研究会」での議論の一部分が本書の内容となったわけです。

1990年代初頭にソヴィエト連邦が崩壊し、社会主義（計画経済）の問題が露呈し、2008年秋以降は資本主義（市場経済）の問題が露呈し始めています。まさに、ジョセフ・A・シュムペーターが『*Capitalism, Socialism and Democracy*』（1942）のなかで資本主義は生き延びうるか、社会主義は作用しうるかという問題を提起したことがら、いま現実に問われなければならない時期に来ているといっても良いのでしょうか。

とかく、効率性や「見える化」が強調され、「手っ取り早さ」を追求しようとする風潮が社会全体的に顕著になっています。こうした傾向に警鐘を鳴らす意味で、本書を通して日本経済の深層を直視することが肝心です。本書を読むことによって、私たちが現実に身を置いている日本経済社会において何が問題となっており、どのような考え方や見方があるのかを知るうえで、少しでも参考になるものがあれば幸甚と考える次第です。

（ふじい ひであき 経済学部教員）



木村 雅昭 著

帝国・国家・ナショナリズム 世界史を衝き動かすもの



ミネルヴァ書房 2009

アメリカとソ連が睨み合っていた時代、私を含めて多くの人々がいつ訪れるかもしれない核のホロコーストの恐怖を胸のどこかに秘めて生きておりました。したがって1989年にベルリンの壁が崩壊したとき、これからは平和な時代がやってくると安堵したものです。しかしそれもつかの間、世界各地で民族紛争、宗教紛争が噴出し、ついには世界貿易センタービルとペンタゴンへのテロ攻撃という衝撃的な事件に見舞われました。その一方、冷戦の勝者アメリカは現存する世界で唯一の覇権国家です。その軍事力は他を圧倒的に引き離し、かつて世界を支配した大英帝国のそれに優り、古代ローマ帝国の再来といった観すら呈しております。このようについこの前までは自由主義対共産主義の政治イデオロギー対立が世界を支配し、米ソ両大国が世界の覇権をかけて睨みあっていたところが、ここ20年ほどの間に世界は大きく変貌してゆくこととなったのです。

数百年に一度とも言われるこうした歴史のうねりは、政治学を研究してきた私には、きわめて興味深いものです。この変化をどのように捉えたらよいのか。これまで私は文明史を踏まえて、政治と経済との関連に焦点を絞って研究してまいりましたが、今回は民族紛争やアメリカ「帝国」の問題を取り上げました。とくにバルカン半島で展開された民族闘争は私の興味をかき立てずにはいませんでした。20世紀も終わろうとしていた当時、ナショナリズムの時代を卒業したといわれるヨーロッパで、なぜに民族がかくも凄惨な戦いを引き起こすのか。ブラウン管から送られてくるジェノサイドの証言と映像、街をはさんで激しく銃火を交える戦闘場面、指導者達の激烈な演説は、はたして自分は20世紀後半の豊かな時代に住んでいるのだろうかという疑念を呼び起こすに充分でした。またそれは民族が解き放つ恐るべきエネルギーを痛感させ、このエネルギーを国家のなかに閉じこめてきた近代の国民国家の意味合いをも再考させることになったのです。

本書の後半は、現代アメリカ「帝国」を大英帝国との比較を通して論じたものです。そもそものきっかけはアメリカのイラク侵攻にありました。サダム・フセインが政敵の虐殺や生物・化学兵器の生産等、数々の問題を起こしてきたことは事実です。しかし、これはけしからんといってイラクに軍事侵攻したところで、アメリカが勝利することは不可能だと当時から確信しておりました。げんにアメリカは、イラク全土の平定に失敗し、なんとか体面を保ちつついま現在、都市部から撤退を始めておりますが、その一方でアフガニスタンへの軍事介入を強めつつあります。アメリカは歴代の覇権国家と較べて寛大な国ですが、にもかかわらずなぜにかくも他国に介入するのか。そこには大英帝国と異なるアメリカ「帝国」の体質が投影されているのではないかと。このことを念頭におきつつ、近代における帝国なるものの実態を明らかにするために、19世紀から20世紀初頭、イギリスとロシアがアジアの覇権をめぐる争った「グレート・ゲーム」にも一章をさきました。

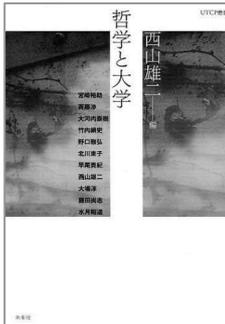
このように本書は、冷戦以後の世界を私なりに考えようとしたものです。まだまだ論じるべき問題が残されておりますが、本書が現代という時代の一端の理解に資すれば幸いです。

(きむら まさあき 法学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 3年次生)



大河内 泰樹 ほか著
哲学と大学
西山 雄二 編



未来社 2009

この論集は、若手の哲学研究者が集まって、大学問題について検討する研究会から生まれた。私たちがそこで共有していたのは、「大学」という制度を支えてきたはずの、理念が失われつつあり、その中でまさに「哲学」という学問が危機に瀕しているという問題意識であった。実際 18 歳人口が目に見えて減少し、さらに国立大学が法人化されてきた中で、「教養」と広い意味での「専門知識」を身につける場とされてきた大学が、スキルを身につけるための場として、専門学校化しつつある（現に中教審は来年度から「職業指導」の授業を全大学に義務づけることを検討しているそうだ）。そこで、そもそも「大学」というものを支えていた理念がどのようなものであったのかを、過去の哲学者の大学論から検討し、その上で現代の大学がおかれている状況を捉え直そうというのが本書の趣旨である。

第一部では、カント、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガー、デリダといった哲学者たちの大学論・大学観がそれぞれの専門家によって紹介され、第二部では欧州や日本の大学の現状が検討されている。かつてフンボルト理念という大学モデルがあった。これは 19 世紀初めに、プロイセンのベルリン大学創設に携わったヴィルヘルム・フォン・フンボルトが「研究と教育の一致」という理念を打ち出したことに由来する。その後このベルリン大学が世界の大学のモデルとなったことからこの理念は大変な影響力を持つこととなった。明治時代に日本が大学制度を輸入したときも、このドイツのモデルが手本となったのである。

ところが、大学全入時代となった現状においてこうしたモデルはもはや不可能であるようにおもわれる。そこで、私が担当した第 3 章では、これに代わる考え方をヘーゲルの「人生の日曜日」という概念に依拠して提示した。哲学者ヘーゲルは 19 世紀前半、ドイツ領邦国家の近代化の時期において、あるときは高校の校長として、そして最後にはフンボルトが作ったベルリン大学の総長として、教育現場に携わった哲学者だった。そうしたヘーゲルが直面

していたのも、教育に実用的な技術の習得だけを求める啓蒙主義の潮流だった。それに対してヘーゲルは彼の友人の教育官僚ニートハンマーとともにギリシア・ラテンの教養にもとづく、人文主義的教育の重要性を訴える。ヘーゲルによれば、近代社会においては、私たちの時間が「仕事」に覆われてしまい、私たちの生活の全体性が奪われてしまっている。そこで、生存のための仕事を離れて、日常を超えた世界に思いをめぐらすための「日曜日」の場所を大学に確保する必要性を訴えるのである。

大学という場が、単に卒業後の仕事のためのスキルを身につける場になってしまったとしたら、大学修了者たちは、そのような「日曜日」を持つ機会を一生奪われてしまうだろう。それは、かつていわれていた「モラトリアム（執行猶予）」とはちがう。なぜなら「モラトリアム」という考え方には、その猶予期間が終われば、仕事に全ての時間を捧げることが前提とされているからである。大学が「人生の日曜日」であることによって初めて、ひとはいわゆる「社会人」になっても「日曜日」を享受することができる。こうして「日曜日」としての大学が失われつつあることは、今労働者が日曜日に休めなくなっていることと無関係ではあるまい。そして重要なのは、そうした意味での「日曜日」はデモクラシーの条件でもあるということである。

(おおこうち たいじゅ 文化学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 3 年次生)



大槻 公一 編著

新型インフルエンザから家族を守る18の方法



青春出版社 2008

この書籍を世に出した時には、鳥インフルエンザウイルスが次の新型インフルエンザウイルスとして大きな災厄を人類にもたらすと考えられていました。私もその可能性を本の中に入れたつもりです。しかし、現在世界で発生している新型インフルエンザは、人類に感染を引き起こした豚インフルエンザウイルスによるものです。H5N1鳥インフルエンザウイルスではなかったのです。しかも、初発は中国あるいは東南アジアではなく北アメリカ大陸だったのです。予想されていた新型インフルエンザウイルスとは大きく異なりました。

5月16日に国内での初めての感染者が見つかったから、これまで4000人を超える感染者が出ました。幸いなことに死者は国内では出ていません。その結果、一般的には、今回のウイルスは弱毒である、あまり大した病気ではない、ウイルス感染に対する備えは余り考慮する必要はない、という動きになっています。ところが、7月末日現在でも、国内での新型インフルエンザウイルス感染者は増え続けています。

考えても見て下さい。今は真夏です。季節性の、通常私たちが感染してきたホンコン型インフルエンザウイルス、ソ連型インフルエンザウイルスあるいはB型インフルエンザウイルスは随分前に姿を消しています。インフルエンザについてはオフシーズンのはずです。ところが、新型インフルエンザウイルスだけは人から人へ感染を続け、患者が出続けているのです。このままの状況が続いて秋が来たらどうなるのでしょうか。心配です。しっかりとした、インフルエンザ対策をとらないまま秋を迎えることになれば、木枯らしのふく季節の前には、新型インフルエンザウイルスは日本国中に蔓延していることも考えておかねばならないでしょう。そのようなことになれば、次のインフルエンザシーズンには、新型インフルエンザの大流行が起きることも覚悟しておかねばなくなるかもしれません。たとえ、ウイルスの病原性に変化が起きなくても、現れる臨床症

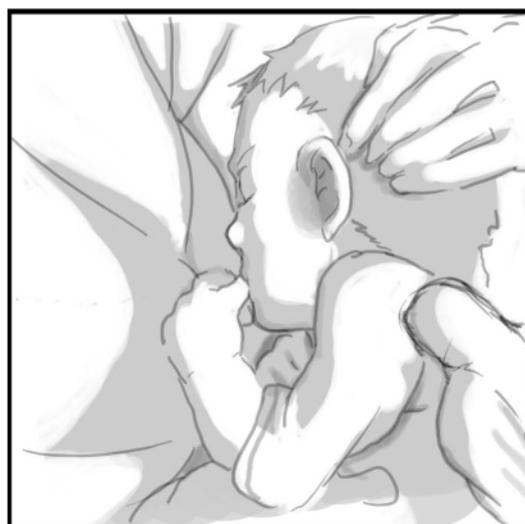
状は現在のものに比べるとはるかに重篤で、少なからぬ死者も出ることが予想されます。そのようなことになれば、これまで言われてきた様な、新型インフルエンザの大流行による社会活動の停止する事態が生ずることもあるでしょう。

そのようなことが起きないことを願っていますが、備えだけはしておく必要はあります。そのためには、本書が読者になにがしかの知恵を授けてくれると思います。特に、前半部分をじっくり読んでいただきたいですね。

本書は、鳥インフルエンザウイルスが(必ずしもH5N1ウイルスが新型インフルエンザウイルスになるとは私は考えては来なかったのですが)、新型インフルエンザウイルスになるという前提では書かれてはいますが、十分に今回の新型インフルエンザ対策に役立つことを確信しています。

インフルエンザをあまり知らなかった人にも、基礎知識を仕込む良い材料です。

(おおつき こういち 工学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 3年次生)